

報告要旨

はじめに

山田定市

今朝岡君が報告いたします「水田利用再編下における生産組織の展開と集落」は私どもの研究室で共同研究の一環として取り上げていることをごさいますして、その辺りの位置づけについて簡単に申し上げてみたいと思います。私どもの研究室は、巾広い社会教育の中でも農村・農業・農民の社会教育を中心にして課題を設定し、重点的に研究を進めております。研究の手法といたしましては社会教育そのものに限定することなく、むしろ展開基盤としての経済構造を含めた基礎構造の分析を行ないながら、それとの関連において住民諸階層の社会教育の諸活動の位置づけと性格、構造を明らかにするという観点で研究を進めているわけでございます。この場合にもいろいろな方法があると思えますけれども、その下部構造の中でもとりわけ生産力構造の分析を基礎に置きまして、その中における生産力、或いは技術の構造的な変化に伴って農民の学習課題がどのようになり歴史的に変わってきているか、またその内容が階層毎にどのようになり違いと矛盾を醸成してきているかという観点で進めております。その一環として、今朝岡君が報告いたしますのは、水田地帯に焦点を合わせてここ数年來研究してきた成果です。

それで、水田地帯もいろいろございますけれども、御承知の方も多と思いますが、北海道にも中核地帯、或いはその限界地帯と思

われるような所などいろいろございますが、ここで取り上げます名寄市は、いわば限界稲作地帯に位置しまして、減反率も五割強と非常に高率な減反のもとで急激な再編をせまられてきたという経過がございます。その辺りに焦点を絞っているわけでございますが、その生産力構造を見る場合に、地域農業をどのように捉えるかということ、いろいろ検討しております。大枠として申しますと、地域農業とはいわば三重構造になっているのではないかとということで、一応のメドをつけております。それは、一つはいりまでもなく地域農業とはいえ個別農民経営がその基礎でございますので、その底辺、最も基礎になる層には個々の農民経営が位置することになります。しかし、これらの個別経営は自己完結的に経営しているのではなく、それを補いまた地域的に生産力を展開する基盤としての生産組織がいろいろな形で集落との関わり合いにおいて形成されている、というのがその上に成り立つひとつの構造でございます。さらにその上に農協とか市町村自治体とか、或いは様々の市町村レベルにはぼ見合った諸機関が位置し機能しているのではないかと考えております。

そういう中で、今日のところはさし当り農協とか自治体の役割と云うのは前提にして、必ずしもそこに深入りはいたしませんで、むしろ個別農家と集落、並びにそれを基礎とする生産組織の関わり合いにつきましても重点的に分析をするということを心懸けております。北海道的な集落の特徴と、それ自体がまた歴史的に、特に最近においてどう変わり、また、それとの関連において生産組織が地域農業の中でどのような役割を果しているのか、その辺りを焦点にして報告させていただきます。皆様方からいろいろと御教示を得たいと考えております。